

トライやる・ウィーク 川西市立中学校の生徒さんが美術学科に挑戦！ 本学(宝塚キャンパス) 2005.6(月)~ 6.10(金)



川西市立中学校(兵庫県・川西市)の生徒さんらによるトライやる・ウィークが実施されました。実習では、美術学科の各コース(美術史・美術理論・洋画・日本画・彫刻コース)の実習を体験してもらいました。

宝塚造形芸術大学選抜美術展 兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー 2005.5(火)~ 5(日)

日本画修復技術の学外授業 2005.5.18(水)



昨年度の春の造形展と卒業制作展で出品された学生作品の中から、秀逸な作品を選出し、特別展覧会を開きました。



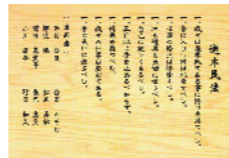
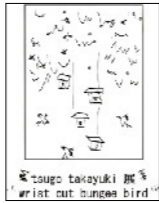
宝塚市中山寺の閻魔堂外部彩色復元現場を見学しました。

のじぎく兵庫国体を前に「壁画」を制作 2005.6.4(土)



2006年秋の開催される「のじぎく兵庫国体」を目前に控え、美術学科の学生や、地元の川西市の中高生らが、弓道が開催される会場近くのブロック塀(約7メートル)に、ペンキを使って色鮮やかに大会マスコット「はたん」などを描いた壁画を完成させました。

津郷峰雪(02年卒) 個展
-wrist cut bungee bird-
神戸市 LUCY 2005.7.14(火)~ 7.24(日)



アトリエ遊木民舎展
京都市 ギャラリー 青い風
2005.6.21(火)~ 6.26(日)
西村公泉先生(彫刻コース教授)と
彫刻コース卒業生によるグループ展

第32回 日本画 真・MAO魚グループ展
京都市 高島屋京都店(階美術画廊) 2005.7.27(水)~ 8.2(火)
曲子明良先生 日本画コース教授 グループ展



NOAジャンルを超えたグループ展
神戸市 市民ギャラリーサンバル 2005.6.10(金)~ 6.22(水)
美術学科卒業生らによるグループ展
(02年卒 / 江夏香織 佐野知子 寺本則夫 小川温子 前田京子)



10匹ねこ展
広島市 ギャラリー青緒 2005.6.11(土)~ 7.3(日)
秋山幸一さん(02年卒)らによるグループ展

溝田裕美(02年卒) 個展
-ムスデン・マトメテン-
神戸市 LUCY
2005.4.15(金)~ 5.15(日)



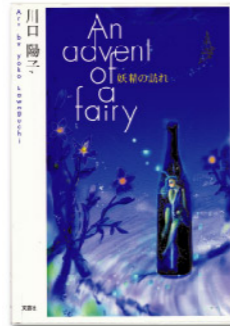
川口陽子さん(04年卒)が画集を出版されました。

心を和ます癒しへの誘い
川口陽子オリジナル「ボトレート展」の集大成



川口陽子さん

私は作品を見てくださった人の心が安らくなりますようにと願って制作しています。妖精たちが貴方に元気を喜びを届けてくれると信じています。だから私は、楽しい夢と優しい心の世界をテーマにしています。あなたが妖精と出会った時、きっと思い出がよみがえるでしょう。— 秘密の花園より—



『An advent of a fairy』-妖精の訪れ-
著作 川口陽子 / 文芸社 定価 2100円



LA BIENNALE DI VENEZIA 2005 ヴェネツィアビエンナーレ・AU展

ベネチア イタリア 2005.5.24(火)~ 6.16(木)

本学美術学科教授 嶋本昭三先生と約100名の本学学生が、ヴェネツィアで作品発表を行いました。



ベネチアAU展について 嶋本昭三

2005年 6月 16日にベネチアより帰国しました。ベネチアでは、美術手帳誌の記者が同じホテルに5日間宿泊し取材をして下さいました。美術手帳(8月号)のピンネラレ特集1頁の中で、肩を私達のために割いてくれたそうなので、ご覧下さい。ベネチアピンネラレの殿堂カ・ペロザ美術館では、私の「女拓」の作品を公開してくれました。一行数十人が訪れましたが、数人ずつ招き入れられ、うやうやしく覆いをとって厳粛な儀式として開示して下さいました。大変参考になりました。ヘリコプターよりイベントを落下させるパフォーマンス。そして、歯ブラシの先に彫刻をしたアートは拡大して、舞い踊る名の美女パフォーマンスに照射しました。



本展覧会の会場風景



イタリアの学生と国際交流をする松井コーヘーさん(02年卒)



嶋本教授のヘリコプターを使ったパフォーマンス



作品 松田明久(洋画 04年)



日本の伝統、着物の美しさを表現



作品 福西奈苗(大学院修士課程)



海外アーティストを交えて作品を制作



徳永智子(洋画 04年)

私は宝塚造形芸術大学の卒業生である。この度、第5回ベネチアビエンナーレの時期に合わせ、嶋本教授と長年交流しているイタリア人アーティストがイタリアでの展覧会を企画し招いてくれた。そこで宝塚造形芸術大学学生諸君と現代芸術団体AUの会員、合わせて約17名の作家がイタリアで展覧会を行う事になり、約10名の宝塚造形大学生や現代芸術家を実際イタリアへ足を運び、ゆかいな23日間の旅が始まった。その展覧会を私が総括したのだ。

23日間のイタリア渡航に多くの現役学生が参加し、発表した事は極めてまれである。というも根拠がある。学生の内から海外で展覧会を行う事等普通では考えられない。学生の発表の場といえば、近所のギャラリーか、がんばっても街のギャラリーだ。しかし今回はそんな小さな事は抜きにしていきなりイタリアへ、しかもベネチアビエンナーレの時期に合わせて作品発表をする事は、学生にとっては大きな刺激であり、歓喜であったに違いない。それを嶋本教授はごく自然とやってしまうからすごみが増す。そしてそれが、宝塚造形芸術大学なのである。展覧会は評判で、中身と意味の或る場となった。その場には多くの美術関係者や観覧者が訪れ、また宝塚造形芸術大学関係者の作品が飛びように求められた。そして実際売場も数名成立しイタリアで認められた現役学生もいた。渡航前より一儲けして帰国した学生の中にはいるのかも知れない。

展覧会ではイタリアの学生と国際的交流もあり、芸術や文化について多に語り合った学生や、中には芸術や文化以上に恋について語る日本男児の学生もいた。しかし恋についてはイタリア人女性にタジタジであったようだが、すべてがすばらしい瞬間であった。また、この旅の一連事は美術手帳に特集として掲載される予定である。

当初は行き当たりばったりと思われがちだったこの旅は、すべて行き当たりビッパリで幕を閉じる事が出来た。それは必然的に良い加減を持って行った宝塚造形芸術大学生を含め参加者全員の自信へと繋がる旅ともなった。

(文: 松井コーヘー)

第58回 関西新制作展 兵庫県立美術館 原田の森ギャラリー 2005.5.5(木)~ 5.13(金)

会員出品



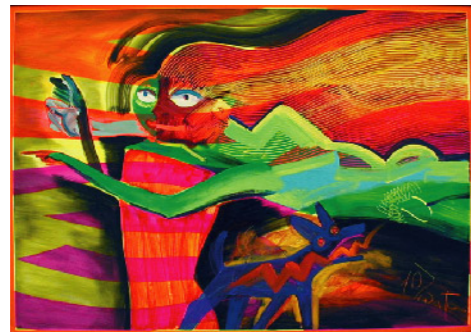
「インダス川(中流域)」 中村貞夫(洋画コース教授)



「四分割された平面的なエロス」 市川悦也(彫刻コース教授)



「街角」 渡辺恂三(洋画コース講師)



「ふたり」 渡辺恂三(洋画コース講師)



「Dub ふたたび」 西田周司(洋画コース教授)

関西新制作賞 今崎順生(05卒)



「エスケープ」



「waltz」

入選

於保真理子(04卒)
北浦直美(05卒)
中島真弓(05卒)
兔子尾智美(大学院博士課程)
野村素生(大学院修士課程)

第79回 国展 東京都美術館 2005.4.23(土)~ 5.7(土)

会員出品



「天の探女(アマノサグメ)」 西村公泉(彫刻コース教授)



「赤き月ノ空ノ下」 準会員 安川弘造(05年大学院修士課程修了)

展覧会・公募

会員出品



「メリケン3号」 準会員 合田望(02年大学院修士課程修了)

国画賞 準会員推挙



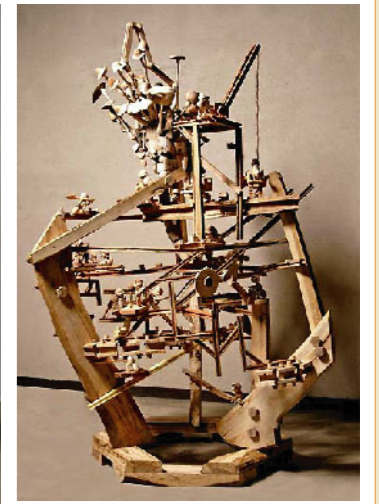
「ジレンマの正体」 丸山智史(05年大学院修士課程修了)

新海賞 準会員推挙



「ウテン ケッコウ」 辰巳忠良(03年卒)

彫刻部奨励賞 準会員推挙



「幻のキノコ建設(株)」 難波 爆(03年卒)

入選 野田和久(05年大学院修士課程修了)・前田真美子(03年卒)

2005京展 京都市美術館 2005.6.7(火)~ 6.23(木)

入選



「意識6」 北浦直美(05年卒)

第58回 芦屋市展 芦屋市立美術博物館 2005.6.18(土)~ 7.3(日)

芦屋市美術協会賞



「根?石?」 林 恭子(洋画 4年)

入選 山本晃子(洋画 4年)

第55回 西宮市展 西宮市立市民ギャラリー 2005.7.9(土)~ 7.24(日)

優秀賞



洋画部門「トルエン」 八木智弘(洋画 3年)

佳作 中野有人(洋画 4年)

SKPシティ クリエイティブ・ヒューマン大賞 2004 一般静止画部門 優秀賞「創造」 木村智博(講師)



この作品の原寸は、14328x 4055pixelというサイズで制作している。レイヤーが分かれた状態のファイルは600MBくらいあり、保存するだけでも、10分程度かかってしまう。印刷サイズは、3m 60x 1m程度。以前から大きな作品を作りたいと考えていたが、ようやく実現させることができた。制作期間は3~4ヶ月。左側と右側を3Dで別々に制作し、Photoshopでつなぎ合わせている。3Dの状態では色はつけずに、MAYAでSV形式で書き出した

パスをIllustratorで開き、各ポリゴンごとに色をつけ、それをPhotoshopで合成するといったややこしい方法をとっている。今回の作品では、ポリゴンの面にスムースをかけず、あえて直線的な面の構成にした。データを軽くするということもあるが、そういった制限をすることで独特の雰囲気が出せると考えたからだ。作品のテーマである、「創造」はミケランジェロの「天地創造」からヒントを得ている。しかし、イラク戦

争や自然災害などが起こり、いろんな意味で人間の生というものを考えるきっかけとなった。この作品を見た方にも命の創造を含め、何かを感じ取っていただければと思う。

(文: 木村智博)